

2021年テーマ

収量500kg/10a、1等米比率80%を目指して！

近年、気候変動の影響もあり、水稻の減収や品質低下が顕著になっています。田植後に急激に気温が上昇することで、水田の過還元化によるガス害(ワキ)で根が傷み、茎数不足等で減収したり、登熟期の高温によって未熟粒が多発して品質低下になったりしています。これを避けるため、根を健全に保つことや稲体の温度や地温を下げるための水管理が重要になります。

収量を確保するための健全な栽培管理が、結果として高品質化にもつながりますので、今後の米づくり情報を参考に適切な管理に努めてください。

① 田植え

- 機械設定の確認を行いましょう。適切な3本/株・坪株数の設定はもちろんですが、側条施肥機の設定や田植同時箱施用剤散布機等の付属品の設定も確認しておきましょう。
- 側条施肥機で毎年肥料が余る設定では十分に肥料が落ちていません。特に、一発肥料や、有機質肥料は通常の肥料より比重が軽いので繰り出し量を調節して、目標とする施肥量にしてください。
- 深すぎる植え付けは分けつを抑制するので、2cm～3cmで田植えをしましょう。
- 箱施用剤は、当面の害虫やいもち病を予防する大切な農薬です。最近多発傾向にあるため、紋枯病予防に効果のある薬剤を選びましょう。

② 田植え後の管理

【活着まで】(3～5日程度)

- 草丈の半分程度の水深に保ちましょう。
(長期間や過度な深水管理は避けましょう。)

【活着後】

- 風の強い日を除き、水深3cm程度の浅水管理に切り替えましょう。
- 山間地で冷たい水が直接流入する水田は回し水などの工夫をしましょう。
- 余り苗はいもち病の発生源になるので、活着後早めに処分しましょう。

